原著論文

「かわいい」という感情を表現する語の変遷

— 古語辞典・国語辞典の記述の分析 —

宇治川 正人

東京電機大学

How the *Kawaii* Emotion had been Expressed in Japanese

— Analysis of Ancient Language and Japanese Dictionaries —

Masato UJIGAWA

Tokyo Denki University, Senjyuasahimachi 5, Adachi-ku, Tokyo 120-8551, Japan

Abstract : This paper reports on the results of a literature review and text-mining analysis conducted to understand how the *kawaii* emotion had been expressed in Japanese. The Japanese term *kawaii* can be translated to English as lovable, cute, pretty, and sweet comprehensively. In Japanese, the *kawaii* emotion had long been expressed using different words, many of which have multiple other meanings. In addition, some words that had been used to express the *kawaii* emotion took on new meanings. The words that had been exclusively used to refer to the *kawaii* emotion are *megushi*, *utsukushi*, *rotashi*, *kahayushi*, and *shiorashi*. In modern Japanese, nuances such as ‘sweet’ and ‘pitiful’ were removed from the concept of *kawaii* whereas others such as ‘smiling’ were added.

Keywords : *Kawaii*, *Transition*, *Text-mining*

1. はじめに

本論は、人々が「かわいい」という感情（以下、「かわいい感情」と記す）が日本でどのように表現されてきたかを把握するために実施した文献調査とテキストマイニングによる集計解析の結果について報告するものである。

日本語の古代語が確立された時期 [1] とされる奈良時代以降、「かわいい感情」は多くの語で表現されてきた。それらの語は他の語意を複数持つものが多かった。また、時代の推移によって、「かわいい感情」を表現する語から、他の語意を表現する語に変化した語もあった。主に「かわいい感情」を表現する語は、特定の時代の「めぐし」・「うつくし」・「ろうたし」・「かはゆし」・「しおらし」などであった。現代の国語辞典では「愛らしい」・「小さい」・「微笑ましい」が「かわいい」・「かわいらしい」という語の中心的な語意となっている。

2. 背景と問題設定

2.1 背景

近年、「かわいい」という概念が商品や空間の設計過程において、基本的な設計概念（キー・コンセプト）として用いられ、成功例も少なくない。筆者が参加した日本建築学会が設置した研究会 [注1] では、設計段階で「かわいさ」を考慮した、あるいは周辺の住民などから「かわいい」と呼ばれる土木・建築の構造物の設計者へのヒアリングを実施し、①利用者に優しい、②利用者を集める、③都市を楽しく、④ネガティブなイメージの払拭などにその目的を大別して、8事例を報告している [2]。

「かわいい感情」を扱った学術研究は、2006年まで保育学やファッションなど一部の領域を除いて、学術論文誌には報告されていない。大倉典子らによる一連の「かわいい人工物の系統的研究」が2007年から報告され始め [3]、入戸野宏はかわいい感情は脳活動や行動の変化として客観的に観察できると考え、2009年から主に心理学分野で様々な知見を報告している [4]。以後、かわいい感情に関する学術研究は、心理学、情報通信、感性工学、デザイン学、ロボット工学など広範な分野に広がり、20011年から2021年にかけては、その特性や効果などが51件報告されている [注2]。

学術研究においては扱う対象を明確に定義することが必須であるが、「かわいい」は日常語であり、日常語は定義に基づいて使用される言語ではない。言語学の分野では、社会や文化の変化に対応して言語も変化しつづけると認識されており [5]、「かわいい」という語も常に変化の過程にあると考えられる。

一般に、事物の由来はその事物の本質を理解する重要な情報となる。「かわいい」の語源は「カオハユシ（顔映し）」とされ、古代から中世までは「いたましい」、「ふびんだ」という語意で使われ、「かわいい」という語意ではなかった [6, 7]。「かわいい感情」の表現の変遷の過程を他の関連がある語との関係と共に分析することによって、語の意味や特性を考察することを本研究の目的とする。

2.2 問題設定

(1) 意味場の理論 一つの語の変化は、それまで、その語意を表していた他の語にも影響を及ぼす。語の意味は、その語単独でなく、他の語との関連性と共に捉えるべきだとする「構造主義」が20世紀の前半に台頭し、1931年にドイツの言語

図1 意味場の概念図 (出典：[8])

学者J. トリアによって、語意を一つの大きな分野の中で他の関連のある複数の語の相互関係をもとに動的に捉える「意味場の理論 (Theory of semantic field)」(図1) が提唱された [8]。

しかし、この「意味場の理論」は「ある一つの意味の場がどういった語によって構成されるのかを示す客観的基準がない」という問題点も指摘されている [9]。

本論では「語意を一つの大きな分野の中で他の関連のある複数の語の相互関係をもとに動的に捉える」という考え方に基いて分析を進める。

(2) 分節化 エスキモーが雪に関して多くの言葉を使い分けるように、ある「言語社会」[注3] でそこに属する人たちが関心を持つ対象には多くの名称ができ、細かく区別されるが、関心を持たない対象には大まかな名称ですまされる傾向がある [10]。ある概念や言葉の意味をどのように分節化 (ものをいくつかの部分に分けること) しているかということは、それぞれの「言語社会」の事情が反映した結果と捉えられる。

(3) テキストマイニング テキストマイニングは、文字列 (テキストデータ) を分析の対象とし、統計学等のデータ解析の技法を適用して知見を得る技術である [11]。対象とするデータで用いられた語の出現回数を集計して主要な概念を把握したり (頻度解析)、一つの文章や段落の中に二つの語が共に存在する現象 (共起関係) の回数を語の親近性あるいは類似性の指標と考えて、分類や図化を行い、主語と述語の関連を分析し、文字列データの作者や作成時期を比較するなど様々な方法が用いられる。

(4) 国語辞典・古語辞典 国語辞典や古語辞典の編集は、多くの資料からその語を用いた例 (用例) を集めてカード化し、文化的・歴史的背景や作成した人物像、描かれた状況などを考慮した意味 (「場面的意味」[12]) を検討し、その語意を分類し、単独、あるいは複数の語義を構成してゆくのが一般的な方法である [13]。従って、語義を編集する作業は、語意の分節化作業であり、国語辞典・古語辞典は語意の分節化作業の成果を集大成した資料とも言えよう。

大型・中型の古語辞典では、項目となる語の語義ごとに用例が示される場合が多い。従って、その用例の出典の作成時期から、その語義が使われた時期を対応付けられる。

(5) 本研究の具体的目標 本研究は、「かわいい感情」を表す語が、どのような変遷を経てきたのか? を調べることを目標とする。

具体的には、辞典編纂者の分節結果である辞典の語義の構成や記述を対象に、テキストマイニングによって、「かわいい感情」

に関連する語の分節化状況を時代区別に集計し、比較する。また、近代と現代の国語辞典の「かわいい」と「かわいらしい」の項目の語義の記述について頻度解析と共起関係の図化を行い、変化の傾向を把握する。

3. 調査分析方法

3.1 「かわいい」の古語の変遷

(1) 「かわいい感情」を表現した古語の把握 「かわいい」の古語は「かはゆし」とされ、古代 (奈良時代) には「気の毒でみていられない、ふびんだ」の意であったが、中世後期に「愛らしい」という語義が加わった。古語の逆引き辞典から「かわいい」の古語とされる語を把握し、その中で、多くの古語辞典に「かわいい」という語義が掲載されている語を選別して、「かわいい」の古語の語義の記述を分析対象とする。

語義の構成や用例の選択は、辞書の編集方針と編集者の言語観や言語感覚に依存するので、少数の編集者の判断結果に偏らないために複数の辞典を用いる。古語辞典は大型と中型辞典が各一冊刊行されている。小型辞典は国会図書館の蔵書として2014年以降に刊行された辞典 (学習用辞典は除く) が4社から一冊ずつ登録されており、それら6冊を分析の対象とした (表1)。設定年次は、なるべく新しい版で、かつ、解析に用いる語義数が確保できることを考慮して設定した。

(2) 語義に用いられた形容詞・形容動詞の分類 「かわいい」の古語の語義の記述をデータとするテキストマイニングによって形容詞・形容動詞の出現頻度を集計し、分節化状況を比較するための分類枠 (分類基準) とするために、出現頻度の多い語の共起関係から、階層的クラスター分析によって、形容詞・形容動詞を分類し、共起関係を図化する。

(3) 分析用ソフトウェア 集計解析には、立命館大学の樋口耕一准教授によって社会調査データのテキストマイニング用に開発されたフリーソフトウェアKH Coderを使用する。

(4) 時代区別分節状況の把握 古語辞典に用例のある「かわいい」の古語の語義を、用例の出典が作成された時代区別に、形容詞・形容動詞の分類枠に沿って出現頻度を集計する。

なお、用例は新しい意味が付加された際には示されるが、変化がない場合は採択されないことが多い。時代区別に集計した結果は、その時代に語が使用された量の指標ではなく、どのような変化が生じたかを示す指標と考えられる。

表1 分析対象とした古語辞典

区分	辞典名、刊行時期
大型辞典	角川古語大辞典 全5巻, 1982-2012 [14]
中型辞典	小学館 古語大辞典, 1983 [15]
小型辞典	学研全訳古語辞典 改訂第2版, 2014 [16]
	旺文社古語辞典 第10版, 2015 [17]
	新全訳古語辞典 大修館書店, 2017 [18]
	三省堂全訳読解古語辞典, 2017 [19]

「かわいい」という感情を表現する語の変遷

表2 分析対象とした近代の国語辞典

区分	辞典名, 刊行時期
大型辞典	大日本国語辞典, 1915-1918 [23]
中型辞典	ことばの泉, 1898 [24]
小型辞典	言海, 1889-1991 [25] 日本大辞書, 1892-1893 [26] 日本大辞林, 1894.6 [27] 帝国大辞典 第1版, 1896.10 [28] 辞林, 1907.4 [29]

表3 分析対象とした近代の国語辞典

区分	辞典名, 刊行時期
大型辞典	日本国語大辞典 第2版, 2006.1 [30]
中型辞典	大辞泉 第2版 上下巻, 2012.1 [31] 広辞苑 第7版, 2018.1 [32] 大辞林 第4版, 2019.9 [33]
小型辞典	ディリリーコンサイズ国語辞典, 2018.2 [34] 三省堂現代新国語辞典 第6版, 2019.1 [35] 例解新国語辞典 第9版, 2019.3 [36] 岩波国語辞典 第8版, 2019.11 [37] 新明解国語辞典 第8版, 2020.11 [38] 学研現代標準国語辞典 改訂第4版, 2020.12 [39] 明鏡国語辞典 第3版, 2021.1 [40]

時代区分は、日本語史の分野で通説とされている、古代前期（奈良時代とそれ以前）、古代後期（平安時代）、中世前期（院政・鎌倉時代）、中世後期（室町時代）、近世（江戸時代）、近代（明治時代以降）の六分法 [20] を用い、「近代」については、国語改革（当用漢字表や「現代かなづかい」の制定）など大きな変化があった第二次大戦後を「現代」と扱った。

3.2 現代の国語辞典の「かわいい」「かわいらしい」の語義

現代の国語辞典では「かわいい」の意味をどう説明しているのだろうか？「かわいい」と「かわいらしい」の語義の記述に対して頻度分析と共起関係の図化を行う。なお、比較のために、近代（明治初期～大正）の国語辞典も頻度分析の対象とする。近代の国語辞典は原則的に文語体を「普通の言葉」とし、古語も項目語として扱うが、口語体は俚言（さ言葉）として参考程度に扱い、「かわいい」と「かわいらしい」は項目語としていない辞書が多いので、「かわいい」に代えて「かはゆし」、「かわいらしい」に代えて「かはゆらし」の語義を調べる。近代の国語辞典は、「日本の辞書の歩み」[21] および「図説 近代日本の辞書」[22] に「近代的国語辞書」として示された計7冊を対象とした（表2）。

現代の国語辞典は、大型辞典1冊と中型辞典3冊が刊行されており、それぞれ最新版を分析の対象とし、小型辞典は国会図書館の蔵書として2018年以降に刊行された辞典（学習用辞典は除く）が5社から10冊が登録されており、そのうち7冊を分析の対象とした（表3）。やはり、設定年次は、版の新しさと語義数の確保を考慮して設定した。

表4 古語の逆引き辞典に示された「かわいい」の古語

あいあいし、あいくろしげ、あいずかはし、あいらし、あはれ・あはれば、いたいけ、いたはし、いつくし、いとし、いとほし・いとほしがる・いとほしげ、うつくし・うつくしげ、うらやまし、かぐはし、かなし、かはゆし、しおらし、つぼし、ともし、なつかし、はし、はしきやし・はしきよし、ふびん、まかなし、めぐし、めだし、めづらし、めでたし、らうたげ・らうたし、らうらうじ、をかし・をかしげ、をし・をしけし

表5 かわいい関連語

かわいい・かわいらしい (31)、いとし (25)、かわいそう (22)、愛らしい (17)、気の毒 (15)、見事 (12)、美しい・いじらしい・つらい (11)、いとおしい、面白い・きれい・可憐・ふびん (9)、はずかしい・哀れ (8)、小さい・幼い (7)

4. 調査分析結果

4.1 「かわいい」の古語の変遷

(1) 「かわいい」の古語 古語辞典の逆引き辞典「現代語から古語を引く辞典」[41] には、「かわいい」の古語として31の語あるいは語群が示されていた。それらの語を表4に示す。

表4に示した31語の中で、表1に示した6辞典のうち、4辞典以上に「かわいい」あるいは「かわいらしい」の語義が示されている語を以降の分析の対象に設定した。それらの語は、下記の11語であった。なお、「いとし」は「いとほし」の変化した語である。

あいらし、いたいけ、いとし、いとほし、うつくし、かなし、かはゆし、しおらし、めぐし、らうたし、をかし

(2) 「かわいい」の古語の語義の形容詞・形容動詞の分類 6古語辞典に上記11語が記述された語義数は合計197語義であった。それをテキストデータとしてKH Coderで品詞別に出現頻度を集計した結果、51語の形容詞と31語の形容動詞が抽出された。その中には「かわいい」の意を持たない語も含まれているが、「かわいい」の古語の語義に登場する形容詞または形容動詞であり、以下、便宜上、これらの19語を「かわいい関連語」と呼ぶことにする。出現頻度が上位の語（出現頻度7回以上、19語）を表5に示す。（）内の数値は出現回数を示す。

(3) 「かわいい関連語」の分類 「かわいい関連語」を対象に、一つの語義に出現する共起関係に基づいて、階層的クラスター分析によって「かわいい関連語」を分類した。KH Coderはクラスタリング法のオプションとして最遠隣法、群平均法、Ward法 [注5] の3方法を備えている。最遠隣法では殆どの語が一つのクラスターに徐々に取り込まれていき、群平均法では約半数の語が一つのクラスターに取り込まれた。Ward法では6クラスターに偏りなく統合されてゆき、各クラスターに属する語の語意も類似性が高いと感じられ、分類枠とする適性が高いと判断した。距離の定義は共起関係を重視するJaccard係数 [注6] を用いた。分類の経過と結果を樹形図として図2に示す。なお、便宜上、各クラスターの名称を各クラスター内で出現回数が最多の語に「群」を付して示す。

図2 「かわいい」関連語の分類結果(樹形図)

「かわいい感情」を直接的に表現する語と考えられる「かわいい」と「かわいらしい」は別の群になり、「かわいい群」には「いとしい」が、「かわいらしい群」には、「愛らしい」と「いとしい」が属している。なお、形容詞には、主観的に感情を述べる「情意性形容詞」と客観的にその状態を述べる「状態性形容詞」という概念もある。「かわいい」は「情意性形容詞」、「かわいらしい」は「状態性形容詞」の性格が強い。

「かわいそう群」と「つらい群」に含まれる語は、古代から中世まで「かはゆし」の語意であった「いたましい」と「ふびんだ」に語意が近い語が属している。

なお、角川古語大辞典[14]では、妻子など肉親を慈しむ気持ちを「愛隣の情」、恋愛関係の相手を切なく思う感情を「愛欲の情」、みじめな事態に接して同情することを「憐憫同情」と表現し、小学館古語辞典[15]では、幼ないものや小さいものの美を「可憐美」、美しさそのものを「美麗」と表現している。「かわいそう群」と「つらい群」は「憐憫同情」、「見事群」は「美麗」、「いじらしい群」は「可憐」という感情に関わる語群と言えよう。

KH Coderで作成した「かわいい関連語」の共起ネットワーク図[注7]を図3に示す。作図に際し、付置した語の円の大きさは出現頻度に比例させ、出現頻度の上位4語は太字とした。円内は図2の分類結果に準じて塗り分け、円を結ぶ線は共起関係(Jaccard係数)が強いほど太くしている。

図の上部には「見事群」の語、左側には「かわいそう群」と「つらい群」の語が集まっており、右下には、「かわいい群」と「かわいらしい群」、「いじらしい群」の語が集まり、群を超えて語と語が緊密に結ばれている。

(4) 時代区別「かわいい」の古語の分節状況 「かわいい」の古語の分節状況の変遷を把握するために、「かわいい」の古語の語義ごとに、その語義で示された用例の出典の作成時期から、時代区分ごとに「かわいい関連語」の出現回数を群別に集計した。なお、一つの語義に複数の「かわいい関連語」が示される場合が多くあり、「かわいい関連語」の出現回数の合計

は、語義数の約2倍の375回であった。その結果を図4に示す。図の縦軸の語の配置は、「かわいい群」と「かわいらしい群」の語の出現回数の合計の降順にした。また、その回数が他の群

図3 「かわいい」関連語の共起ネットワーク図

図4 時代区分・群別「かわいい」関連語の出現頻度

「かわいい」という感情を表現する語の変遷

の語を含めた回数に占める比率（構成比）が高い語は、『主に「かわいい感情」を表現する語』と考えられる。構成比が75%を超える語に●を付し、構成比が0%の語は「かわいい感情」とは無関係な語として▲を付した。

図4では大多数の語に複数の群が出現している。●を付した『主に「かわいい感情」を表現する語』は、奈良時代の「めぐし」・「うつくし」と平安時代の「ろうたし」、室町時代の「かはゆし」・「しほらし」の5語であった。なお、平安時代の「めぐし」と鎌倉時代の「あいらし」は、「かわいい群」と「かわいらしい群」の語の構成比が70%以上で、上記5語に準ずる語である。時代区分を超え、長期に渡って『主に「かわいい感情」を表現する語』であり続けた語は皆無である。

▲が付された語は、平安時代と鎌倉時代の「かはゆし」、鎌倉時代以後の「うつくし」、鎌倉時代の「をかし」と江戸時代の「かなし」であった。「うつくし」は鎌倉時代以降、「見事群」だけが出現する語となっている。

「語意の一つの大きな分野の中で他の関連のある複数の語の相互関係をもとに動的に捉える」ために、図1意味場の概念図の「場」を図2の「群」に、「語」を「古語」に対応させ、図5を作成した。

図5 時代区分別「かわいい」の古語と群の関連図

作図に際し、「かわいい群」と「かわいらしい群」は共に「かわいい感情」を表す語であると考え、同じ「群」として扱った。また、図の信頼性（ロバストネス）の確保という観点から出現回数が少数（7回以下）の古語は除いている。また上層の特定の群の出現回数の構成比が75%を超える語を結ぶ線は太線とした。

図1では「語彙」・「場」・「語」は上層を頂点とするピラミッド状に結ばれているが、図5では下層の古語が複数の上層の群と結ばれた逆ピラミッドが数多くみられる。一つの語が多くの群と結ばれることは、その語が、意味範囲の広い、融通性のある多義的な語であったことを物語っている。

「うつくし」は奈良時代は『主に「かわいい感情」を表現する語』として「かわいい・かわいらしい群」だけと結ばれ、平安時代は「いじらしい群」「見事群」とも結ばれているが、鎌倉時代は「見事群」だけと結ばれている。「かはゆし」は鎌倉時代には「かわいそう群」と「つらい群」と結ばれているが、室町時代には『主に「かわいい感情」を表現する語』となり、「かわいい・かわいらしい群」と「いじらしい群」に結ばれており、大きな語意の変化があった。

4.2 現代の国語辞典の「かわいい」「かわいらしい」の語義

表2と表3に示す近代および現代の国語辞典の「かわいい」と「かわいらしい」の項目の語義の記述に対して頻度分析を行った。語義数は近代の国語辞典が34語義、現代の国語辞典は49語義であった。

近代の国語辞典からは13形容詞と3形容動詞が、現代の国語辞典からは18形容詞と10形容動詞が抽出された。外来語は出現していない。出現頻度が3回以上の語を図6に示す。作図に際し、棒の部分は図2の分類結果に準じて群別に塗り分けた。どの群にも属さない語は白地とした。なお、出現頻度が2回の語は、近代の国語辞典では、「気の毒」・「いつくし」・「むづう」・「可愛い」・「むごい」、現代の国語辞典では、「好ましい」・「弱々しい」・「弱い」・「頼りない」などであった。

近代および現代の両方の国語辞典で頻度回数が多かった語は、「愛らし（愛らしい）」・「かはゆらし（かわいらしい）」・「小さい」・「美しい」の4語であった。「愛らし（愛らしい）」・

図6 国語辞典の「かわいい」「かわいらしい」の語義の多頻度語

図7 現代の国語辞典の「かわいい」「かわいらしい」の語義の共起ネットワーク図

「小さい」「美しい」「かわいそう」「幼い」は表1「かわいい関連語」に含まれており、「かわいい」の古語の語義でも出現頻度の多かった語である。

一方、「かわいい」の古語の語義では出現頻度が比較的高い「いとしい(いとおい)」は近代の国語辞典では「いとほし」という語で出現していたが、現代の国語辞典では出現していない。やはり「かわいい」の古語の語義では出現頻度が比較的高かった「かわいそう」は、近代の国語辞典での出現回数は1回のみで、現代の国語辞典では出現頻度が上位となった。

「かわいい関連語」に含まれていなかった「微笑ましい」「愛くるしい」「大事」は、近代の国語辞典には出現しておらず、現代の国語辞典だけに出現した語である。

現代の国語辞典の「かわいい」「かわいらしい」の語義の出現頻度が3回以上の語の共起ネットワーク図を図7に示す。付置した語の円の大きさは出現頻度に比例させ、出現頻度の上位3語は太字とした。円内は図2の分類結果に準じて塗り分け、どの群にも属さない語は白地とした。円を結ぶ線は共起関係が強いほど太くしている。

共起ネットワーク図は、中心部に出現頻度が上位の3語が太い線で結ばれ、周辺部に出現頻度が5回以下の語が出現頻度が上位の3語を取り囲む形状となっており、現代の国語辞典では、その上位の3語が「かわいい」「かわいらしい」の語義の中心的な語であることを示している。

なお、図3で示された共起関係は、「かわいい」の古語に対する古語辞典の語義を文字列データとしたもので「かわいい」「かわいらしい」の出現頻度が高かったが、図5の語の共起関係は現代の国語辞典の「かわいい」「かわいらしい」項目に対する語義の文字列データであり、語義の文章に「かわいい」「かわいらしい」の出現頻度は低かった。

5. 考 察

5.1 「かわいい」の古語の分節状況

(1)「かわいい関連語」の分類 「かわいい関連語」19語は、階層的クラスター分析により6つのクラスターに分割された。分析に際して用いた文字列データは、かわいい関連語の古語辞典の語義の記述を文字列データとしたもので、現代の古語辞典編集者たちの言語観・言語感覚が反映されたものである。

図4『時代区分・群別「かわいい関連語」の出現頻度』と図5『時代区分別「かわいい」の古語と群の関連図』から、図3『かわいい関連語の共起ネットワーク図』の上部の「見事群」は、平安時代は「見事群」の語意も持ち、鎌倉時代以降は「見事群」のみに特化した「うつくし」の「美麗」を表す語意群で、図の左側の「かわいそう群」と「つらい群」のグループは、平安時代は「かわいそう群」のみで鎌倉時代には「つらい群」も加わった「かはゆし」および、それに似た傾向の「いとし」による「憐憫同情」の語意群と考えられる。

(2)「かわいい感情」を表現する語の変遷 「主に「かわいい感情」を表現する語」は、奈良時代の「めぐし」「うつくし」と平安時代の「ろうたし」、室町時代の「かはゆし」「しほらし」の5語であった。

「かわいい感情」だけでなく、「かわいい感情」以外の複数の語意を持つ語も数多く存在していた。一つの語が複数の語意を持つことは特異な現象ではなく、辞典編集者でない一般の人々も「場面的意味」の理解によって意思疎通を成立させてきたと考えられる。その「場面的意味」を理解して意思を疎通させる能力は、言語を正確かつ厳密に使えない人同士でも、スムーズな意思疎通を可能とさせる能力ではないだろうか。

「うつくし」と「かはゆし」は時代区分によって大きな語意の変化があった。鎌倉時代から室町時代にかけての時期は、発音や文法など日本語全体に大きな変化があり、古代語が崩壊し、現代語が芽生え形成されていった時期[42]とされる。その原因として、それまでの畿内の公家や貴族の言語社会に、武家や庶民の言語の影響が及んだことが挙げられている。

言語学者の池上嘉彦は、語の意味が変化する時、原義と転義の間に何らかの形での連想関係があり、その連想の原因には、外見や内部の構成などが似ている「類似性」と、空間的、時間的、あるいは因果関係などが近い「近接性」の2種がある[43]と述べている。学術研究の分野では、かわいい色や大きさと質感は心拍数を増加させる傾向があること[44]、人はかわいいものを見ると表情筋が変化して笑顔になること[45]が報告されている。変化した語の間には、心拍数や表情・仕草などに同様なまたは相似した変化が存在していたなら、その結果連想されたとも考え得る。

5.2 現代の国語辞典の「かわいい」「かわいらしい」の語義

「かわいい感情」を表現する語の変遷を概括的に把握するために、「かわいい」の古語に対する古語辞典と近代および現代の国語辞典の語義に出現した形容詞・形容動詞の出現頻度の上位の語の順位表を作成した。なお、「かわいい感情」を

「かわいい」という感情を表現する語の変遷

表6 語義の形容詞・形容動詞の出現頻度の上位語順位表

	古語辞典	近代の国語辞典	現代の国語辞典
語義データ	「かわいい」の古語	かはゆし・かはゆらし	かわいい・かわいらしい
順位	①いとし(25) ②かわいそう(22) ③愛らしい(17) ④気の毒(15) ⑤見事(12)	①愛らし(17) ②小さい(9) ③はずかし(8) ④いとほし(4) ⑤美しい(4)	①愛らしい(20) ②小さい(20) ③微笑ましい(9) ④かわいそう(4)

表現する形容詞・形容動詞の動向を把握するため、「かわいい(かはゆし)」「かわいらしい(かはゆらし)」は順位から除いた。順位を表6に示す。( )内の数値は出現回数である。

古語辞典では最上位だった「いとし」は、近代の国語辞典では旧形の「いとほし」が第4位となり、現代の国語辞典では出現しなかった。第2位の「かわいそう」は近代の国語辞典での出現回数はわずか1回であった。第3位だった「愛らしい」は、近代および現代の国語辞典で最上位となっている。

現代の国語辞典では、情意性形容詞で「憐憫同情」の意を表す「かわいそう」の順位が低下し、「小さい」「微笑ましい」など客観的な状態形容詞が上位を占め、「愛らしい」「小さい」「微笑ましい」が中心的な語意となっている。

6. ま と め

6.1 得られた知見

(1) 「かわいい」の古語の変遷 日本語の古代語が確立されたとされる奈良時代以降、「かわいい感情」は多くの語で表現されていた。主に「かわいい感情」を表現する語もあれば、「かわいい感情」以外の複数の語意を持つ語もあった。「かわいい感情」の語意を主に表現すると考え得る語は、奈良時代の「めぐし」「うつくし」と平安時代の「ろうたし」、室町時代の「かはゆし」「しおらし」の5語であった。

「うつくし」は主に「かわいい感情」を表現する語から「美しい」の意を表す語に変化し、「かはゆし」は「憐憫同情」を表現する語から「かわいい感情」を表現する語に変化した。

(2) 現代の国語辞典の「かわいい」「かわいらしい」の語義 現代の国語辞典では、「愛らしい」「小さい」「微笑ましい」が「かわいい」「かわいらしい」の語義の中心的な語となっている。

(3) 有効性と限界 本研究では、古語辞典と国語辞典の記述をデータマイニングの文字列データとした。古語辞典と国語辞典は著作物や資料に書かれた文字から用例を収集し、編集される方法が一般的であり、話し言葉や電子的手段で交わされる情報は用例として取り上げられ難いため、本分析にも反映されていない。

6.2 今後の展望

言語や言語感覚は後天的に形成されるもので、生育環境や文化的・歴史的状況の影響を大きく受け、個人差も大きい。行動や身体の生理的変化の計測という手段では言語感覚のような微妙なニュアンスを把握することには限界がある。

一方、言語は人文社会科学の分野では学術研究の歴史が長く、知見の蓄積も豊富である。そこで、本研究では言語学や日本語史の研究成果を基礎的なデータとして扱う方法を採用した。「場面的意味」や「情意性・状態性形容詞」などの概念は調査結果の解釈に大変有益であった。「心地よさ、美しさ、おもしろさ」のように日常語で表現される心のはたらきを“感性”と捉える感性工学の分野[46]では、「かわいい」という問題以外にも、日常語の特性について蓄積のある人文社会科学の知見を活用できる可能性は高いと思われる。

注

- [注1] 日本建築学会 環境心理小委員会 かわいいと建築に関する研究ワーキンググループ(設置期間2013.6～2017.3)。
[注2] CiNii(国立情報学研究所学術情報ナビゲータ)による「かわいい」「かわいさ」という語を含む学術団体や教育機関の論文誌に掲載された文献数。検索日は2021年4月5日。
[注3] 言語社会(speech community): 言語のある変種を少なくとも一つ共有し、それに対して同じ社会的態度をもつ話し手の集団を指す。言語共同体ともいう[47]。
[注4] 古語辞典では、矢田勉が大型(10万項目以上)、中型(5万～10万項目)、小型(2万～5万項目)と述べている[48]。なお、国語辞典では、大型(約20万項目所収)、中型(10万～20万項目)、小型(6万～10万項目)という区分が通説とされている。
[注5] Ward法: 2つのクラスターを統合する際に、クラスター内の平方和が最小となるようにクラスターを形成する。
[注6] Jaccard係数: Paul Jaccardが考案した集合の類似度を測る指標。語Aと語Bのどちらかもしくは両方を含む「文書」のうち、語Aと語Bの両方を含む「文書」の割合。
[注7] 共起ネットワーク図: 出現パターンが似通った語、すなわち共起の程度が強い語を線で結んだネットワーク図。語はネットワークを見やすくする位置に付置され、共起関係の強さは線で表現される[49]。

参 考 文 献

- [1] 沖森卓也: 日本語全史, 筑摩書房, pp.20-24, 2017.
[2] 日本建築学会(編): 「かわいい」と建築, 海文堂出版, pp.75-135, 2018.
[3] 大倉典子, 青砥哲朗: かわいい人工物の系統的研究, 横幹連合コンファレンス予稿集, 2007(0), p.82, 2007.
[4] 入野野宏: “かわいい”に対する行動科学的アプローチ, 人間科学研究, 4, pp.19-35, 2009.
[5] 小松英雄: 日本語はなぜ変化するか 母語としての日本語の歴史, 笠間書院, p.5, 2013.
[6] 増井金典: 日本語源広辞典, ミネルヴァ書房, p.42, 2012.
[7] 山口佳紀(編): 暮らしのことは 新語源辞典, 講談社, p.259, 2008.
[8] 池上嘉彦: 意味の世界 現代言語学から見る, 日本放送出

- 版協会, p.131, 1978.
- [9] 斎藤純男: 言語学入門, 三省堂, pp.125-127, 2010.
- [10] 池上嘉彦: 意味の世界 現代言語学から視る, 日本放送出版協会, p.214, 1978.
- [11] 樋口耕一: 社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して, ナカニシヤ出版, p.1, 2014.
- [12] 中田祝夫他: 古語大辞典, p.10, 小学館, 1983.
- [13] 神永暁: 悩ましい国語辞典, 時事通信社, pp.279-298, 2015.
- [14] 中村幸彦, 岡見正雄, 阪倉篤義(編): 角川古語大辞典, 第1巻-第5巻, 角川書店, 1982-1999.
- [15] 中田祝夫他: 古語大辞典, 小学館, 1983.
- [16] 小久保崇明(編): 学研全訳古語辞典 改訂第2版 小型版, 学研教育出版, 2014.
- [17] 松村明, 山口明徳, 和田利政(編): 旺文社古語辞典 第10版 増補版, 旺文社, 2015.
- [18] 林巨樹, 安藤千鶴子(編): 新全訳古語辞典, 大修館書店, 2017.
- [19] 鈴木一雄, 小池清治, 倉田実, 石埜敬子, 森野崇, 高山善行(編): 三省堂全訳読解古語辞典, 三省堂, 2017.
- [20] 沖森卓也: 日本語全史, 筑摩書房, pp.15-16, 2017.
- [21] 辞典協会(編): 日本の辞書の歩み, 辞典協会, 1996.
- [22] 沖森卓也(編): 図説 近代日本の辞書, おうふう, 2017.
- [23] 上田万年, 松井簡治: 大日本国語辞典, 富山房, 1915-1918.
- [24] 落合直文: ことばの泉, 大倉書店, 1898.
- [25] 大槻文彦(編): 言海, 大槻文彦, 1889-1991.
- [26] 山田美妙(編): 日本大辞書, 日本大辞書発行所, 1892-1893.
- [27] 物集高見(編): 日本大辞林, 宮内省, 1894.
- [28] 藤井乙男, 草野清民(編): 帝国大辞典, 三省堂, 1896.
- [29] 金沢庄三郎(編): 辞林, 三省堂, 1907.
- [30] 小学館国語辞典編集部(編): 日本国語大辞典 第2版 精選版, 小学館, 2006.
- [31] 松村明(監): 大辞泉 第2版 上下巻, 小学館, 2012.
- [32] 新村出(編): 広辞苑 第7版, 岩波書店, 2018.
- [33] 松村明(編): 大辞林 第4版, 三省堂, 2019.
- [34] 佐竹秀雄, 三省堂編修所編: デイリーコンサイス国語辞典 第6版, 三省堂, 2018.
- [35] 小野正弘 他: 三省堂現代新国語辞典 第6版, 三省堂, 2019.
- [36] 林四郎(監): 例解新国語辞典 第9版, 三省堂, 2019.
- [37] 西尾実(編): 岩波国語辞典 第8版, 岩波書店, 2019.
- [38] 山田忠雄(編): 新明解国語辞典 第8版, 三省堂, 2020.
- [39] 林史典(編): 学研現代標準国語辞典 改訂第4版, 学研プラス, 2020.
- [40] 北原保雄(編): 明鏡国語辞典 第3版, 大修館書店, 2021.
- [41] 芹生公男(編): 現代語から古語を引く辞典, 三省堂, p.210, 2007.
- [42] 沖森卓也: 日本語全史, 筑摩書房, p.15, 2017.
- [43] 池上嘉彦: 意味の世界 現代言語学から視る, 日本放送出版協会, pp.133-137, 1978.
- [44] 大倉典子, 後藤さやか, 肥後亜沙美, 青砥哲朗: かわいい人工物の系統的研究 第6報 かわいい感の生体信号による検出, 自動制御連合講演会講演論文集, 52, p.126, 2009.
- [45] 入野野宏: 行動科学的アプローチによるかわいい人工物の研究, 感性工学, 10(2), pp.91-95, 2011.
- [46] 椎塚久雄(編): 感性工学ハンドブック, pp.2-3, 朝倉書店, 2013.
- [47] 田中春美他(編): 現代言語学辞典, 成美堂, p.622, 1988.
- [48] 矢田勉: 辞書案内2020国語辞典, 東京大学総合文化研究科・教養学部, 教養学部報, 617, 2020.
- [49] 樋口耕一: 社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して, ナカニシヤ出版, pp.157-158, 2014.

宇治川 正人 (正会員)

1972年 東京工業大学大学院理工学研究科 (社会工学) 修士課程修了, 博士 (工学).
1972年 株式会社竹中工務店入社. 現在, 東京電機大学未来科学部研究員. 著書に『魅力工学』(海文堂), 『建築空間のヒューマナイズ』(彰国社), 『日本建築学会編「かわいい」と建築』(海文堂) ほか.